

新刊紹介

山岡道男・増井由紀美・五十嵐卓・山内晴子・

佐藤雄基著

『朝河貫一資料』

(早稲田大学アジア太平洋研究センター、二〇一五年)

河西 英通

朝河貫一(一八七三〜一九四八)の名は日本中世史・比較法制史家として、あるいは日米関係論者・日本文化紹介者として知られる。さまざまな困難を乗り越えて、日本人としてアメリカの大学で初めて正教授になった人物である。一九三七年に六四歳でイエール大学の歴史学教授となり、一九四二年に定年を迎えたのちも、名誉教授として研究を続けた。福島県尋常中学校時代に英語の辞書を暗記しては食べ続け、残った革表紙を校庭の桜の根元に埋めたという「朝河桜」のエピソードや、日米の衝突や開戦を避けるべく奔走し、戦後も日本の民主化のために尽力したことも有名であろう。

朝河に関しては、阿部善雄『最後の「日本人」…朝河貫一の生涯』(岩波書店、一九八三年)をはじめ、朝河貫一研究会が編集した『朝河貫一書簡集』(早稲田大学出版部、一九九〇年)『朝河貫一の世界』(早稲田大学出版部、一九九三年)『甦る朝河貫一』(国際文献印刷社、一九九八年)などがあり、近年では山内晴子『朝河貫一論』(早稲田大学出版部、二〇一〇年)がある。朝河貫一研究会は一九九一年に創立され、二〇一四年に第一〇〇回目の研究会を迎えた『朝河貫一研究会ニュース』(第一号〜第六〇号)国際文献印刷社、二〇〇七年および本書附録1、参照)。

本書は朝河貫一研究会の主要メンバーである山岡道男・増井由紀美・五十嵐卓・山内晴子・佐藤雄基の各氏によって発足された朝河貫一研究会が編集した資料集であり、「第一章 早稲田大学アジア太平洋研究センター資料室所蔵『イエール大学所蔵朝河貫一文書』」「第二章 福島県立図書館所蔵資料」「第三章 イエール大学所蔵資料とその他」「第四章 朝河貫一の平和への提言(演説・会話・書簡の翻刻と翻訳)」および付録から構成される。

以下、朝河貫一研究の基本資料である①イエール大学スターリング記念図書館所蔵資料、②早稲田大学アジア太平洋研究科所蔵資料、③福島県立図書館所蔵資料、④その他の資料に沿いながら、本書の内容を紹介していこう。

①はらわゆる *Asakawa Papers* 「朝河ペーパーズ」であり、書簡、日記、原稿・ノート・雑録からなる六〇ボックスのうち一四ボックス分がマイクロフィルム化（一〇リール）され、その後七ボックスが追加されている（Yale University Library Manuscripts and Archives: Guide to the Kanichi Asakawa Papers）。マイクロフィルムは二〇一三年に東京大学史料編纂所が購入したことにより、同所図書室で閲覧可能となった。「朝河ペーパーズ」の概要については、第一章の『*Asakawa Papers*』と『エール大学所蔵朝河貫一文書』対照表』、「マイクロフィルムのリール番号」*Asakawa Papers* の Boxes, Folders, Frames 番号」、第三章の「イエール大学図書館所蔵朝河貫一文書（*Asakawa Papers*）の基礎的研究」（佐藤氏執筆）末尾の『*Asakawa Papers* 目録」を参照されたい。

②は「朝河ペーパーズ」のマイクロフィルム一〇リール分をプリントしたもので、全四六巻のB本と全四一巻のR本の二種類がある。それぞれの対応関係は、第一章の『エール大学所蔵朝河貫一文書』B本巻数と頁数』、「早稲田大学アジア太平洋研究科資料センター所蔵『エール大学所蔵朝河貫一文書』『R本』と『B本』の対照表」を参照されたい。

③は同図書館が作成した計二五二九通の書簡リストを

あらためて「朝河発信和文書簡」「朝河受信和文書簡」「その他朝河関連和文書簡」「朝河発信欧文書簡」「朝河受信欧文書簡」に再編集したものである（第二章の「福島県立図書館作成の内容注記付書簡リスト」）。この資料群を「朝河ペーパーズ」の書簡群（第一章の『*Asakawa Papers*』の書簡リスト）および両者以外の書簡群（第三章の『*Asakawa Papers*』と福島県立図書館所蔵以外の書簡所蔵先リスト）と合わせるならば、本書がのべているように『朝河貫一文書簡集』第二巻の出版も準備段階に入ったといえよう。

④は上記①～③以外に所蔵されている書簡などである（第三章の『*Asakawa Papers*』と福島県立図書館所蔵以外の書簡所蔵先リスト）、第四章「朝河貫一の平和への提言」。当然ながら、これ以外にも書簡はある。たとえば、巻末の参考文献中にも朝河書簡を見出すことができる。一九四九年の『社会経済史学』第一五巻第三・四合併号に掲載された滝川政次郎「故朝河貫一氏と私」には一九四八年六月二七日付の滝川宛朝河書簡が紹介されており、「史家が不断に考量すべき主題の一は、各国民の心理作用の特徴にあるべし。如何にして之が次第に築造され来りしや。如何に此心癖が環境に接して表現され来りたるか。その諸史期における作用と変遷とは如何。全史を貫通する特殊性如何。諸国交渉の場合如何に各自の殊心が交働するや。此互作用

が各自の心理に反響したる状如何。之による実史影響は如何。もし政治史のみならず、文化史も、法制史さへも、皆追々に展化する活物なりとせば、此根本の心史を多少捉ふるにあらざれば、浅薄を免がれざるにあらざるか。且つ此の理会なしに諸国相交渉せば、重大の禍害を来すことなかるべきか」という、朝河の歴史研究と歴史実践をつなぐ重要な環ともいふべき「心史」への言及が見られる。この書簡は同年五月三十一日の朝河宛滝川書簡（福島県立図書館所蔵書簡、本書一三六頁参照）への返信だが、こうした発掘（再発見）は今後もなされるべきだろう。

とまれ、日記（第一章の「*Asakawa Papers* の日記目録」、写真資料（第二章の「福島県立図書館所蔵の朝河関連写真」、年表（付録1）、家系図（付録2）、詳細な参考文献（付録3）なども駆使することで、新しい朝河貫一像が浮かび上がってくることは間違いない。

福島県二本松の人、朝河貫一は早稲田大学（当時、東京専門学校）を経て、渡米後ダートマス大学、イエール大学で歴史学を学び、イエールで教鞭をとり、晩年はスターリング図書館隣の大学院棟九階に移り住み、日本人の国民性や天皇制について研究をすすめた。朝河ゆかりの地に所蔵されている資料を手繰ること、朝河史学の全貌が見えてくることだろう。これは近代日本史学の再検討と再構成に

とって、極めて刺激的なことである。

（広島大学大学院文学研究科教授）